大学体育の教養について¹

杉 山 進 (お茶の水女子大学)²

はじめに

教養体育の現場で30年を超える月日を過ごしてきている。大学体育への度重なるパッシングと1991年の大学設置基準の大綱化、そしてカリキュラム改正から、国公立大学の法人化、評価、FD活動といった変革が継続している。この間、日本学術会議「大学の分野別質保証に向けて」のシンポジウムに参加する機会があり、改めて大学での教養、そして大学体育の教養教育について考えさせられた。

教養とはなにか

2000年に大学審議会から「グローバル時代に求められる高等教育の在り方について」が答申されたが、その中で教養教育について4点が挙げられている。¹⁾「第1番目は、社会生活を送る上で、基本的な知識と理論の修得が目的である。第2番目は、現代の諸課題を総合的に判断して、対処できる能力を育成するのが目的である。第3番目は、専攻する学問分野の理解を助け、総合的な視点を醸成することが目的である。第4番目は、専門分野に関連する分野に学際的に取り組めるような能力の養成が必要だ。」そこでの教養概念は、特に3番目と4番目に見られるように専門基礎といった意味合い

が強いものであった。

そして、設置基準の大綱化から11年を経過した2002年に中央教育審議会から「新しい時代における教養教育の在り方について」²⁾が答申された。これは国立大学での教養部廃止によって生じた多くの大学での教養教育への軽視に対する警告と見られた。従来の古典や名著講読などによる教養ではなく新しい時代の教養として、重視すべき5つの点をあげているが、私なりにまとめると次のようである。(1)主体的に行動できる力(2)外国語の能力(3)科学的理解力や判断力(4)国語の力(5)身体感覚として身に付けられる「修養的教養」などである。(2)(3)(4)は従来とさほど異なるものでなかったが、(1)(4)については、高等教育版「生きる力」といった感があった。留意点として、(1)主体的な態度を身に付けさせる、学ぼうとする意欲を重要視する、(2)新しい知識を獲得し、それを統合していく力を育てる、(3)異文化をはじめ他者との交流や接触が重要なことを挙げ、さらに、正規のカリキュラムだけでなく、「部活動やサークル活動を通じて協調性や指導力の資質を磨くこと」であるとして、授業以外の活動をも視野に入れた答申をしている。こうした教養をどのように培うかについては、単に高等教育だけでなく生涯を通じて涵養してゆかなければなら

¹ What is the Object of Physical Education in the Higher Education?

² Susumu SUGIYAMA, Graduate school of Humanities and Science, Ochanomizu University, 2-1-1 Ohtsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610, Japan

いとして、生涯スポーツを例として「スポーツを通じて身心を鍛え、フェアプレーの精神を養うこと」などにも言及している。ここでの教養はこれまでより幅の広いいわゆるリベラルアーツであろう。

そして現在、2008年中央教育審議会答申「学士課程の構築に向けて」³⁾を受けて、文部科学省から審議依頼を受けた日本学術会議が学士課程教育の枠組みづくりを進めている。中教審答申では、学士力に関しては、その学習成果を重視して、「何を教えるかよりも何ができるようにするか」が大事であると強調している。「大学の分野別質保証に向けて」⁴⁾のシンポジウムはその中間報告で、そこで大学の教養について報告している。要するにこれは大学での教養教育の評価基準といったものであるが、そこでは、「市民性の涵養」ということを謳っている。「市民性」とは社会の公共的課題の発見とその解決のために協働（連帯）する能力である説明されている。これからの目指されるべき人間像は「自立した強い個人」から「協働・連帯する諸個人」にシフトすべきであり、要するにユニバーサル段階に達した大学では「協働する知性」⁵⁾が学士課程で求められるという。そこでの教養の概念は余り明確でなく抽象的なものに留まっている。学者の数ほど教養の定義があるといわれ、明確な概念規定ができないことの方が当然で、それが、学術会議の良識というものが、もう少し別の言説からみてみよう。

阿部⁶⁾は教養の問題を、社会とは異なる世間の問題との絡みの中で捉えようとしている。いわゆる本音と建前の違いに見られる日本文化において、教養とは西欧の自立的な個人の完成を目指した知的教養とは、決定的に異なるとして、「これまでの教養は個人単位であり、個人が自己の完成を願うという形になっていた。しかし、『世間』の中で個人一人の完成はありえないのである。・・・その上で、『世間』の中

で自分の役割をもたなければならないのである。」と述べているが、こうした見解を聞くようになるほどと思える。

大学体育の教養とはなにか

専門課程と異なる教養の大学体育で何を教えるべきか、今までどんな論議がされてきたか雑ばくながらみてみよう。大学設置基準の大綱化を受けて（社）全国大学体育連合では大学保健体育基本構想⁷⁾を作成し、その目的について、「保健体育科目は、大学教育の一環として、身体や身体運動に関する幅広い知識や技術を授け、学問的な思考態度を養うとともに、身体や身体運動を通して知的、道徳的、身体的教養を育成し、身心ともに健康で豊かな人間性の発達を図ることを目的とする」と謳っているが、この身体的教養とは何なのか。

基本構想に基づく大学体育の展開を図るべく、（社）全国大学体育連合で「大学体育で何を教えるか」をテーマに研修会やシンポジウムが盛んに開催してきた。そうした最中、平成6年度の中央研修会では「これからの大学体育に向けて-何を教えるか-パート2」⁸⁾としてシンポジウムが開催された。3名のシンポジスト⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾がそれぞれ大学で何を教えるかについて述べている。

松岡⁹⁾は大学の体育は「自己のリアリティを基盤とした教育である」と述べ、例として「具体的な体力について考えるなら、自己の外の基準によって規定された評価基準によって従って考えるだけでなく、自己の身体の実際を介在させたところから得るリアリティをもとに、自己の中に評価の基準を設定することが考えられなくてはならない。このような学び方が体育という教科の本質であると思う。」さらに、大学体育の授業を受ける前と後の違いについての質疑¹²⁾の中で、次のように応えている。「スウィート・スポットにボールが当たる感じはやってみ

なければ分からないのです。そのことが実体験を通して分かってとき、初めて自分の技術になるのであり、本当に分かったということになると思います。・・・自分の体験を通してものを考えること、自分が本当に分かったということを経験させる場面として体育を位置づけたいと思います」と例をあげてわかり易く述べている。

同じ質問に伴は¹⁰⁾「・・・走れば汗がでます・・・水分を補給しなければならぬ・・・身体の中の60%強が水分なのですが、そのうち何パーセントを失うと生命に危険になるか・・・水は流動的で・・・身体の内外を繋いでいる・・・その水に有害物質が含まれていたらどうなるか、・・・水と生活する人間の関係を考える。こうした思考過程が結果として現れてこそ、大学体育の独自性が確立するのではないか・・・」テーマ別の教養科目講義のようにも受け取れるが、こうした考えの基にはどこか博学的知識といった教養概念が見られるが、逆に教養概念には誰が教えるのかといった視点が欠如していることに気づかせてくれる。私はこの点は大事なことであると思う。何を教えるかだけでなく、誰が教えるか、どのように教えるかと併せて考えなければならぬ問題なのだと思う。池田は¹¹⁾「・・・体育というのは・・・自分の体を使った実験をするのに格好な場所です・・・要するにセルフレグレーション、セルフコントロールの能力をつけさせてやれば、それが僕たちの目指す体育が出来ることではないかと思います。」この考えは多くの同調者がいるように思えるが、要するに自己の健康・体力の維持管理を理論と実践を統合して行っとうこうとするものである。

以上、こうした論議からみえてくる身体的教養とは、実際、自分のからだやってみてわかる学びで、そうして得たものを既存の知識や理論と関連づけ、自らの生活の中にも位置づけてゆく、そうした能力といえるだろう。同様なこ

とを、遠藤¹³⁾は大学のスキー実習の中で述べている。その狙いとするところは「知の身体化、自己化を果たす」こと、つまり客観的知識を、からだを通して自分のものとしてゆくことであるという。そのために課題解決能力や厳密な方法論の修得、自己開発、生の人間関係づくりといったことを挙げている。しかし、この「身体的教養」という用語について論者はだれも取り立てて語っていない。基本構想の目標に出てくるが、テーマとして取り上げ論議されてこなかったようだ。この「身体的教養」とは、教養の中でも身体に関わる事柄といった意味であるが、どこか、その裏に「知的教養」に対する対抗心が見え隠れする。教養概念の中での知的独占権への反対といった意味合いが強く感じられる。

(社)全国大学体育連合の基本構想⁷⁾では大学体育の目標を基本的目標だけでなく、さらに、「発展的目標」「目標的目標」と3層の重層構造としてとらえている。「身体的教養」は、その基本目標の中の一つで、その他に、「発育・発達の促進」「健康・体力の維持管理」「運動文化の伝達と発展」「社会性、道徳性の育成」をあげている。「発展的目標」には、「運動的世界の経験」「身体経験」「身体的自己表現」「鑑賞力(運動を見る目等)の養成」「生涯学習の一環」といった項目が見られる。そして、大学教育の目標そのものである「目的的目标」には、「理論と実践の統合力の育成」「学問的精神の養成とそれに基づいた学習態度の育成」「意志と勇気の陶冶」「自己開発能力」「創造的能力の育成」をあげている。こうしたそれぞれの目標の関連については、「目的的目标が基本的目標と発展的目標を媒介にして目指されることこそ、大学教育における保健体育科目の独自性と存在意義が認められる」と述べられている。今みてもよくできたものだと感心させられ、作成に関わった方々の苦勞が感じられるが、ここでも一つ気になることがある。

「運動的世界の経験」「身体の経験」が発展の目標としてあげられ、「身体的教養」が基本的目標とされていることに対する疑問である。スポーツや運動の世界や身体の経験を通して、豊かな多様な経験を蓄積させることが、基本的目標ではないであろうか。「身体の経験」という用語については、スポーツ教育を主唱するグループ¹⁴⁾が、その教育的意味について、「スポーツ活動を通して自分の身体とはなにかを経験できる」「この経験を通して具体的な意味とはなにかに関する認識が深まってゆく」「自身の能力や限界を知る機会を与えてくれる」といったことを述べているが、このように解釈するのであれば、基本的な事柄のように思える。そうした上に教養というべきものがついてゆくのではないのか。

大学体育での学習成果についての論文を例にして考えてみよう。『大学体育学』で、取り上げられている最近のテーマは「人間関係」¹⁵⁾
¹⁶⁾「コミュニケーションスキル」¹⁷⁾ ¹⁸⁾「健康づくりへの実践行動」¹⁹⁾ ²⁰⁾「授業の楽しさ感情」²¹⁾「全般的体力」²²⁾「スピード、敏捷性、すばやさの評価法」²³⁾などである。こうしたテーマが大学体育で目指される資質や能力に適合しているかどうかは、所属大学の教育理念との照合が必要であるが、基本構想に適合したものであると判断される。そしてこれらを「身体的教養」で括することができるとしても、こうしたコミュニケーションスキルにしても、体力項目の一つ一つにしても豊かな多様な運動世界の経験、スポーツ世界の経験、そして身体の経験を積むことによって可能なのである。

高邁な教養概念を標榜しても、学生が実際身につけることができるのかという問題意識が、先に述べた「学士課程の構築に向けて」の答申の中身であろうが、最近の大学体育は「授業で学生がどう変るか」、「どのように変るか」といった研究成果を積み上げている。それぞれの研究の結論に導く手法はテストや調査、測定、

および統計的手法を組み合わせたものである。客観的指標に基づく結果を導いての考察から得られたもので、まだまだ、端緒についたばかりの実証的研究で、その研究成果も含め教育成果についての評価も今後委ねられるだろう。しかし、こうした研究成果がデータとして蓄積させてゆくことが、大学体育の教養を明確にしてくれることになると思う。

身体の教養とは何か

『体育・スポーツ哲学研究』において、以前、私は大学体育の実技実習の授業を考える上で「アーノルドの『熟練的知』やポランニーの『暗黙知』といった概念の適用が有効である」²⁴⁾と述べたが、そのことについて触れながら、身体の教養について考えてみたい。

まずアーノルドと、ポランニーの知についておさらいをしてみよう。P.アーノルド²⁵⁾は我々人間の知識を「knowing that」「knowing how」「熟練による知識」「暗黙知」の4つに分類している。本来分けることができないが、一般的には最初の2つは頭の知識、後ろの2つがからだの知識といったものである。「knowing that」は「半径が大きくなれば角速度は増す」といった物理法則など「・・・についての知識」で、学校で暗記する多くの知識がこの種のものである。「knowing how」は「・・・のやり方についての知識」で逆上がりのやり方は知っていると知った知識である。「熟練による知識」は運動の感覚的知識で、逆上がりができるといったことである。「暗黙知」はこうした前3者の根底に横たわる知識であるといっている。この暗黙知はM.ポランニー²⁶⁾からの援用した用語である。ポランニーの暗黙知を如実に示す言説が「われわれは語る事ができるより多くのことを知ることができる」というものである。ポランニーのいう「知ることができるわれわれ」とは身体である。例として「ある人の顔を、千あ

るいは万もの顔と区別し、認知できる。」を挙げているが、その意味するところは、反対に「でもその人の顔をどのように認知するかを語れない。」といっているのである。これは、身体の多様で豊かな感覚的経験を、われわれはことばにできない事態を示している。そして、外界を知る、その究極的装置がわれわれの身体であることを表しているのである。

ここでは、暗黙知から科学的知識に連なる知あるいは知識の関連において、主観的なものから客観的な方向に向かう知の関連づけ、つまり抽象化と、客観的なものから主観的にものに向かう具象化といった方向が考えられる。教養とは一方的な関連づけというよりは、両者の知の統合といったものを想定しているのであろう。

この暗黙知に替わって最近では身体知ということばが用いられる。三砂²⁷⁾が語る身体知とは、「月経時の出血をコントロールできる能力」といったものである。暗黙知については、その豊かさと非言語化について強調されたが、この身体知については、その喪失について語られている。三砂は、調査によって、80歳以上の女性の中にはこうした身体知をもった人が多くいたという事実を挙げて、現代ではそうした身体知が失われていっているという。また、内田²⁸⁾も「身体の深いレベルにある感応力、ある種の集中的な訓練を通じてはじめて発現されるようなポテンシャルを開発する伝統的な身体知がどんどん失われ、潰されていってしまった。」と述べている。

身体知とは、身体の経験の蓄積によって身についたいわばスキルである。習慣によって身につく様々なスキルも同様であるが、習慣的スキルとは、環境の一義的な意味受容といったものである。熟練といった事柄とはまた別な次元のことである。熟練したスキルとは身体の機能の緻密性に関する事柄であるからだ。身体の経験を蓄積して身体知に、そして、熟練した知になってゆくのであろう。

三砂と内田が危惧する事態は、大学体育の授業の中でも生じている。「力の入れ方がわからない」「立ち幅跳びで、どこに力を入れたら、遠くに跳ぶことができるかわからない」「手首の関節を、指導者のことば通りに動かせない」「呼吸の仕方がわからない」。このようなことは注意深い指導者であれば、いくらでもあげることができるだろう。こうした学生に、知的訓練がことばから始まるように、からだのことばになる身体の経験、運動の経験、感覚訓練といったことから始めなければならない。そうした意味では、まず基本は身体の経験というべきで、そうした経験に自覚的になれるような環境整備と、指導がなされることが大事である。

古代ローマの詩人ユベリウスの「健全なる精神は健全なる身体に宿る」の例、昔の大学の恩師の姿（身体）からでる風格、背筋を伸ばしたすっきりした姿勢の老人から感じる威風堂々とした印象など、身体から出てくる人格的なものに身体の教養と呼んでよいものを感じるのは私だけだろうか、これは世代的感覚で古い教養主義というべきであろうか。

ともあれ、身体の教養とは、高みを目指しながらも、高等教育版「生きる力」ともいうべき「身体の経験を高める」ことから始めるべきであろう。

参考文献

- 1) 吉田憲司 文部省高等教育局企画課課長補佐（2000）講演：21世紀の大学教育について 大学体育68号 pp. 3-16
- 2) 中央教育審議会答申「新しい時代における教養教育の在り方について」（平成14年2月）（抄）
- 3) 中央教育審議会大学分科会 学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）平成20年3月25日 学士力の参考指針として次のように示している。1. 知識・理解：(1) 多文

- 化・異文化に関する知識の理解, (2) 人類の文化, 社会と自然に関する知識の理解, 2. 汎用的技能: (1) コミュニケーションスキル, (2) 数量的スキル, (3) 情報リテラシー, (4) 論理的思考力, (5) 問題解決力, 3. 態度・思考: (1) 自己管理能力, (2) チームワーク, リーダーシップ, (3) 倫理観, (4) 市民としての社会的責任, (5) 生涯学習力, 4. 総合的な学習経験と創造的思考力: これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し, 自らが立てた新たな課題にそれらを適用し, その課題を解決する能力. その他, 学習時間の確保と単位制度の実質化, 成績評価(出口管理), 初年餌教育の配慮についても言及している.
- 4) 小林傳司(2009) 今日的な教養と教養教育 公開シンポジウム 大学教育の分野別質保証に向けて 日本学術会議からの報告 東大安田講堂 平成21年11月23日
 - 5) 藤田典英(2009) 講演: 学術会議の審議進捗状況について 参考資料「分野別質保証のための参照基準について」 青山大学 平成21年10月17日
 - 6) 阿部謹也(2008) 「教養」とは何か, 講談社現代新書
 - 7) 大学保健体育40年の歩み (社) 全国大学体育連合 1993 30-39
 - 8) シンポジウム「これからの大学体育に向けて-何を教えるか-パート2」大学体育53号 pp. 50-97. 1994
 - 9) 松岡信之 身体のリアリティーを基盤とした教育 pp. 50-53 大学体育53号 1994
 - 10) 伴 義孝 大学体育で何を教えるか pp. 54-70 大学体育53号 1994
 - 11) 池田克紀 これからの大学体育 pp. 71-73 大学体育53号 1994
 - 12) シンポジウム「これからの大学体育に向けて - 何を教えるか - パート2」 質疑・応答・討論 pp. 74-84 大学体育53号 1994
 - 13) 遠藤卓郎 大学教育におけるスキー実習の意味 pp. 14-21 大学体育48号 1993
 - 14) オモ・グルーペ, ミハエル・クリューガー 著 永島惇正他共訳(2000) スポーツと教育 ベースボールマガジン社
 - 15) 徳山郁夫他4名 体育実技における人間関係の変貌について - 相互的教材開発という視点から - 大学体育教育研究(助成研究) No. 12 15-24 大学体育70号 2000
 - 16) 橋本公雄(2009) 「健康・スポーツ科学演習」の授業で人間関係は醸成されるか? 大学体育第6号 23-31
 - 17) 西田順一他2名(2009) 「大福帳」を用いて対人コミュニケーション支援を意図した大学体育実技が初年次学生の大学適応感に及ぼす影響 大学体育第6号 43-54
 - 18) 杉山佳生(2008) スポーツ実践授業におけるコミュニケーションスキルの向上の可能性 大学体育学 3-11
 - 19) 岩崎洋子他1名 女子大学における「フィットネスコース」受講が健康・運動意識や行動にどのような変化を与えたか - 特に運動を得意としない学生に関して - 7-17 大学体育教育研究(助成研究) No.19 大学体育82号 2004
 - 20) 木内敦詞他4名(2009) 体育実技終了時のセルフ・モニタリングが運動の意思決定バランスと身体活動量に及ぼす効果 大学体育第6号 3-11
 - 21) 養内 豊(2009) 運動に対する主観的評価と感情変化の関係 大学体育第6号 13-22
 - 22) 下田政博他4名(2008) 大学生の健康関連体力向上に対する教養科目「スポーツ・健康科学実技」の役割と大学教育におけるその意義 大学体育学 13-26
 - 23) 角南良幸他3名(2009) 大学体育実技のためのSAQ関連体力測定および評価法の検討 大学体育第6号 33-42

- 24) 杉山・小林・奈良(2001)大学体育の現状
と課題 体育・スポーツ哲学研究 vol.
23-2 pp. 1-16.
- 25) P.アーノルド(1979)“Meaning in Movement,
Sport and Physical Education”, Heinemann:
London.
- 26) マイケル・ポラニー著 佐藤敬三訳
(1980)『暗黙知の次元』紀伊國屋書店
- 27) 三砂ちづる(2004)「オニババ化する女た
ち」光文社新書
- 28) 内田 樹・三砂ちづる(2006) 身体知 -
身体が教えてくれること - バジリコ
-

受理 2009年12月10日